

轍から見た長岡京の造営

「^{わだち}轍」は、「輪つ道」、「輪立ち」とも書き、車輪が通った痕跡が筋状に残ったものを言います。発掘調査は地面に残る生活の跡を見つけ、その中に含まれる当時使われたものや道具などを見ていく作業ですが、人の足跡や車輪の跡が見つかる例は意外と少ないものです。足跡や車輪の跡は後世に削られて消滅していたり、何度も利用されてその痕跡がなくなるためでしょう。轍が発掘調査で見つかる例としては、湿地などの軟弱な地面に車輪の跡が残り、その上面が洪水によって一気に埋もれ、轍がそのまま残る例があります。また、礫を敷き詰めた路面で、加重のかかる荷物を乗せた車が何度も行き来し、礫が窪み、そのまま残る例もあります。

長岡京の発掘調査では、幅数 cm から 10cm 程度で並行して走る 2 本の溝を「轍」として認定しており、牛車と呼ばれる二輪車が残した痕跡と思われます。長岡宮・京では、轍は 10 数か所で発見されています。多くは条坊の道路路面からですが、宅地内や宮内でも見つかる例もあります。この 2 条の轍の間隔から、車幅（車輪間隔）がわかります。1.45 m 幅が最も多く、1.35・1.55 m の幅のものも見られます。



路面に残された轍（長岡京跡二条条間北小路）

きれいに残っている轍の断面形は方形ですが、何度も通行しているところでは「U」字形になっています。深さは 8 ～ 20cm とバラツキがあり、地盤の硬軟や牛車の荷重の違い、通行量の違いによるものでしょう。

牛車^{うしぐるま}には、乗用車としてのものと荷車としてのものがあります。絵図や文献を見ると乗用車は荷車(台車)の上に「箱」と呼ばれる家形が取り付けられています。が、轍の間隔からは、乗用車として使われたのか、荷車として使われたものなのかは分かりません。



瓦窯に残る一輪車の轍（鹿背山瓦窯跡）

牛車は、人力で運ぶ量の5～10倍の様々な荷物を運搬できる車です。長岡京跡二条条間北小路と東三坊大路交差点西寄りの路面で轍が見つっています。左京二条四坊七町に運河と船着き場が見つかりましたので、ここまで平城京や難波宮の建物が解体されて船に積まれて運ばれ、牛車に積み替えられた上で、都の各場所へと運ばれた時の轍でしょう。また、長岡京跡右京第26次調査では、西二坊大路の路面と宅地内で轍が見つかりました。この宅地の南側に隣接する今里車塚古墳の墳丘が削り取られていますので、墳丘の土を荷車で運搬した時のものかもしれません。

長岡京造営は急ピッチに進められたと考えられていますが、轍痕跡が多く残ることからも、荷車としての牛車が頻繁に利用され、活躍したことが窺われます。最後に蛇足ですが、古代ローマンロードでは、石畳で舗装されている路面に予め轍が作られていました。それは、戦車、荷車を速やかに走らせるためのものです。偶然の一致ですが、長岡京跡の車輪間隔1.45 mは、日本の新幹線のレール幅、古代ローマの轍幅とほぼ同じ寸法です。

(竹井治雄)